
バカと教師と兄弟と

滅却師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと教師と兄弟と

【Nコード】

N11290

【作者名】

滅却師

【あらすじ】

文月学園に教師として入った男「吉井秋人」。彼の受け持ったクラスはなんと、学園一の問題クラスと呼び声高いFクラスの副担任だった！問題が山積みの学園で、彼はどんな教師生活を送るのか！？まさかの教師視点開始！！

キャラ設定(前書き)

随時更新します

キャラ設定

主人公設定

吉井秋人 27歳 男

吉井家の長男で吉井明久と吉井玲の兄。文月学園Fクラスの副担任。担当教科は全て。

性格は面倒事が嫌いだが、頼まれたことはしっかりとやるようにしている。教師の仕事に就いており、文月学園に来る前にはいくつかの学校で教師をしていた経験がある。

一応大学は出ているため、吉井玲には劣るもののそれなりに頭は良く、雑学に詳しい。

カースト制度採用の吉井家に生まれ育っているため、料理の腕はかなり良く、明久に料理のイロハを教えた師匠的存在でもある。作る料理は明久よりもうまい。しかし食事はもっぱら外で済ませている生徒と接するときは敬語などは一切使わず、親友のように接するため、生徒からの評価はそれなりに良い。しかし明久の兄ということとで教師陣からは若干煙たがられている（鉄人と校長は除く）

三度の飯より煙草が好きで超ヘビースモーカーで、生徒の前でも堂々と煙草を吸っている。そのため、よく鉄人に追いかけられる場面を目にすることもある。

外見はストレートの黒髪を腰くらいまで長く伸ばし、中間くらいで結っている。瞳も黒で、目つきが少し悪い。学園内では眼鏡を着用しているが、そとではコンタクト。

また生活は明久が住んでいるマンションの空き部屋に移り住んでいる。

24の時に結婚したが、現在バツ一。理由は……後々で。

首に写真入りのロケットペンダント、そして渋いオイルライターを常備している。これが無くなったりすると一変、なりふり構わずに

探す。

第1・0問(前書き)

駄文の可能性大。

第1・0問

「……聞いてはいたけど、ここまでとはな」

俺の担当する教室、Fクラスの前に来て、目の前の悲惨な光景に思わずそうつぶやいた。

目の前の教室は窓はボロボロ、扉はガタガタ、蜘蛛の巣も張っている。ここが教室だと聞いて、何人の人間が信じるだろう。少なくとも、俺が教師でなかったら信じないだろう。

今日からこの副担任になると思うと、少なからず頭痛がする。

この文月学園は成績上位者には良い待遇を、成績下位者には悪い環境をという、世界的にも全く新しい学園なのだ。理由としては良い待遇になりたければ勉強をして這い上げろという、下剋上制度みたいなものだ。

そしてもう一つこの学園で特徴的な物は「試験召喚システム」なるものがある。これは点数に比例した自身の分身、召喚獣を駆使してクラス間で戦争をする「試験召喚獣戦争」を行うことができる。これによって、たとえば最低ランクのFクラスがもしもAクラスに勝てば、AとFは設備を入れ替えることができる。ま、FがAに勝つなんて不可能だと思っけどな。

「それでは今日からこのFクラスの副担任になる人に入ってもらう」

どうやら西村先生の話が終わったようだ。そんじゃ、入るとしますか。

俺は開け辛そうな引き戸に手をかけて、多少力を入れて開き入る。すると教室内に居たほぼ全員の男子からため息が漏れた。おおかたこのバカどもは女の副担任が来ると思ってたんだらう。ざまあみ

る。

俺はそれを気にすることなく、教卓に歩み寄り今日から俺の生徒となる奴らに目を向ける。

「あゝ、今日からこのFクラスの副担を受け持」に、兄さん!？」

「……」

「……あゝ、そうだった。そういえばここにあのバカがいるのすっかり忘れてた。面倒だけど、一応話しかけておいてやるか。」

「……おい明久。紹介の途中で邪魔をするな。首を180度捻じるぞ」

「いやっ、そんなことしたら死んじゃうから! ていうか久しぶりに会ったのにその扱い酷過ぎない!？」

「バカに対する扱いは酷いってのは万国共通なんだよ。知らなかったか?」

「そんな万国共通あつてたまるか!!!」

ふむ、しばらく見ないうちにちゃんとした常識を覚えたか。あの常識知らずよりはまだましになったか。

「……すまないが秋人先生。吉井明久とは知り合いなのか?」

「あれ、話していませんでしたっけ?」

「……何も聞いていない」

西村先生が良く分からないといった顔で聞いてくる。そういえば、ここに入るときに何も話さずに入いったっけな。面倒だけど、後々のことを考えると説明しといたほうがいいな。

生徒たちも興味しんしんと言った目で見てくる。何故か特に女子生徒二人からの視線がすごい。俺は軽く咳払いをして、説明を始め

た。

「あ、簡単に説明すると俺の名字は吉井で、つまるところそこに居る人類を超越したバカである吉井明久の、実兄だ」

瞬間、今まで聞いたことのないほどの音量の驚きの声が俺の耳を突き抜けた。

これはまた面倒なことになりそうだ。この予感が近いうちに的中することになるなど、俺は知る由もない。

第1・0問（後書き）

次の話は、1巻と2巻あいだらへんから始めます。

第2・0問

「……面倒だな」

俺は煙草を吸いながら、屋上で呟く。

Fクラスの副担当になって数日。バカの集まりだと思ってはいたが、あそこまでバカだとは思わなかった。

高校2年にもなるというのに基礎レベルの問題すら解けないし、最低一日一回は問題を起こす。特に土屋康太とかいう小柄な生徒は盗撮の常習犯。この前にやっているとところを捕獲して、デジカメのデータを抹消してやったというのに今日もやっていた。

そしてその写真を買っている連中がFクラスの奴らだ。前に見つけ次第、買ってる連中全員補習室にブチ込んでおいてやった。

まだこれだけならいい。一番の問題は買ってる連中の中に俺の弟がいたということだ。

副担任になるときに明久が俺の弟だということがバレて、瞬く間に学園中に広まった。

「あのバカ、俺の顔をつぶす気か？」

明久の奴はすでにこの学園で知らぬものはいないほどの問題児だと鉄人（西村先生）から聞いた。何をやらかしたのかは知らないが、問題児は問題児だ。

そんなバカと関係がある俺は、教師陣から見れば厄介者予備軍でとこだ。別に他人の目を気にするほど俺は柔じゃないが、クビの可能性があっても不思議じゃない。

「ま、別にいつか」

クビになることはたいした問題じゃない。なったらなつたで、他の職につけばいいだけの話だ。

俺は煙を肺いっぱい吸い込み、吐きだす。灰が屋上の床に落ちる。俺はそれを足で払い散らす。煙草吸っているのがばれたら学園長のババアに何言われるか分かったもんじゃやない。

一本、吸い終わる。続いて二本目。口にくわえつつ、ライターを探す。上着のポケット、無い。ズボンのポケット、無い。落としたかもしれないと焦ったが、さっき使ったのを思い出した。上着の内ポケット、あった。高級感漂う、ちよつと渋い色したオイルライター。火をつけ、吸う。深々と煙を吸い込む。

煙草は有害物質を大量に含んでいるから、妹や両親に禁煙しろと口うるさく言われているがやめる気に全くなれない。大学にいた時暇つぶしに煙草の害を調べたことがあったがかなりのものだ。口腔ガンの発生率は通常の3倍。食道ガンは2倍。肺ガンだと4倍。喉頭ガンに至っては、なんと32倍だ。知った時は驚いたが、やめる気はない。早死にすると分かっているのに。いや、もしかしたら俺は死にたいのかもしれないな。

じつとライターを見つめる。

「煙草やめろつつつたくせに、なんでこんなもんくれたんだ？」

最近すっかり独り言が癖になってしまった。いまだにあいつを忘れられていない証拠だ。

二本目が短くなり、そろそろ戻ろうと思った時、屋上のドアが開く。誰かと思えば、俺の受け持つクラスの明久とピンク髪の女子だ。

「あれ、兄さん？ 何でここにいるの？」

「何って、見たらわかるだろ。煙草吸ってたんだよ。お前はどうしたんだ？」

「ん？ 僕たちはここで昼食べるから、場所取りに来たんだよ」

なるほど。たしかにこの青空の下で食う飯は、さぞうまいだろうな。

「あ、あの……」

「あ？ どうした姫路？」

Fクラス二人だけの女子の一人、姫路瑞希が小声で何か言おうとしている。

「その、学園で煙草吸うのは、駄目じゃないんですか？」

「あゝ、確かにそうだがな……」

あゝ、こういった生真面目な生徒って、俺苦手なんだよな。俺は特に悪びれることもなく、煙草を口から話して指で挟む。

「姫路よ、生真面目なのは結構だが、人間たまにはハメ外したい時つてのがあるんだ。分かるだろ？」

「で、でも……」

「……兄さん」

「あゝあゝ、分かった分かった。んな目すんなよ」

俺を責める目で見てくる明久に、苦笑しながら煙草を吸うのをやめる。明久の反応から姫路が明久にとってどういう存在かも分かった。昔から、自分の感情に素直な奴だな。

俺はポケットから携帯灰皿を取り出し、その中に吸いかけの煙草をねじり込み火を消す。肺に残った最後の煙を味わうように吐きだす。

煙を吐き出しながら、ドアに向かった歩く。その途中で明久の頭をガシガシと手荒く撫でる。

「わっ、に、兄さん。何するんだよ！」

「……そいつ、大切にしていられよ」

俺みたいにならないようにな。

言葉には出さず、心の中で言い含め、俺はその場を立ち去った。

明久はよく分からないといった顔をしていたが、そのうち分かるようになるだろう。

階段を降りながら、ほんの少し肺の中に残っていた煙草の煙を吐く。

その味は、さっきと違って少し苦く感じた。

第2・0問（後書き）

文才の無さに自分もびっくり。まあ、でも趣味で描いているものなのでどうかお許しを。

第3・0話（前書き）

久しぶりの更新で迷走。

第3・0話

なつかしい夢を見た。

まだ俺が世界が俺のために回ってると思っていた糞野郎だったころの、甘ったるすぎて吐き気のする夢だった。

だがその甘さに、俺は酔っていた時もあった。

「秋人君！ 秋人君！」

夢の中、昔よく行った原っぱで彼女が笑っている。

「ほら、花の冠だよ！」

太陽のような笑みを浮かべながら、ずいっとうまく出来ている花の冠を俺に自慢げに見せてきた。

彼女がくるくると踊るたびに長くてふわっとした黒髪も一緒に舞い踊る。そして、無邪気な笑みを俺に向けている。

自然と、顔が綻ぶ。

ああ、これは夢だ。分かっちゃいる。けどもうすこしでいいから、この夢に酔っていたい。

手が伸びる。彼女の手を優しく握り、そっと胸に抱き寄せる。

懐かしい彼女の香りが鼻をくすぐる。手からは今なお、記憶に新しい彼女のぬくもりがよみがえってくる。これは現実なんじゃないのかと錯覚してしまいそうなほど、この夢は甘美だった。

「どっした、秋人君？」

子犬のように、くりくりとした目で彼女がしたから見上げてくる。俺はさらに強く抱きしめる。

「別に……ただ、お前とこうしていただけたよ」

「ふふっ、秋人君は甘えん坊さんだね」

「ああ、俺は甘えん坊なクソがきだよ」

はははっ、と二人して笑い合った。夢の中で俺は久しぶりに本当に笑った。同時に、悲しくなった。

この甘くて優しい夢が終わる。確実に、絶対にだ。人は夢の中に永遠にいることはできない。

俺は願った。

なあ、神様。もしあんたが本当にいるんなら、俺はあんたにお願いするよ。こいつが聞いたら、泣きながら怒りそうだけど、願うよ。だからよ、神様。

俺は自嘲的な笑みを浮かべながら、呟いた。

俺を殺してくれ、と

瞬間、視界に映るすべてが遠のいていった。腕の中に抱いていた彼女も景色と一緒に遠のいていく。

視界が暗くなっていく。その薄れていく意識の中で最後に見た彼女の顔は、とても悲しい顔をしていた。

「結局、夢でおしまい、か」

目が覚めれば、そこは最近引っ越してきたばかりのマンションの天井が目に映る。

だるい身体をゆっくりとおこし、周囲をゆっくりと見渡す。部屋はそこらじゅう開けていないダンボールと食い終わった弁当のゴミだらけだ。唯一今いるベットだけは清潔だ。

時間を見てみると、今は朝の6時半。学校に行くにはちょうどいい時間帯だ。

ベットから下りようとした時、そう言えば明久が今日は早く起こしてくれたのなんだの言っていたな、と思い出した。

いつもの俺だったら普通に起こしに行ってるだろう。だけど今日の俺はあの夢を見たせいですこぶる機嫌が良くない。

「一発、平手でぶん殴っておくか」

そうすりゃ、幾分かは気が晴れるだろうな。

俺はそう決めて、そこらに置いておいた服を掴み、着替えを始めた。

第4・0話

吉井秋人先生からの問題

(1) 試験召喚獣を呼び出すときに皆が言う『サモン』。これを英訳し、どういう意味であるかを答えよ。

姫路瑞希の答え

英訳「summon」 意味「召喚する、呼び出すなど」

秋人のコメント

「正解だ。他にも要求する、召集する、勧告するなどもあるが、こころへんは後々覚えておけばいい」

木下秀吉の答え

英訳「samon」 意味「召喚する」

秋人のコメント

「英訳は不正解だが、意味はあってるな。英訳をしっかりと覚えておくように」

吉井明久・土屋康太の答え

英訳「Salmon」 意味「サケ」

秋人のコメント

「せめて意味ぐらいは分かっておけ。あと明久、お前は家で説教な」

どーにも、俺は祭りというものがあまり性に合ってないらしい。向かいから楽しそうにしながら走ってくる生徒たちを俺はひらりとかわすついでに注意をしながら、ぼんやりとそんなことを思った。今文月学園では新学期始まってそうそう、清涼祭という学園祭をやるらしい。今はその準備の時期だ。

お化け屋敷をするために教室を改造するのに忙しそうなおともあれば、喫茶店でもやるのか、洒落たカップや皿にそれっぽい制服を運んでいるところもある。

生徒たちは皆、楽しそうな表情で取り組んでいる。教師としてはこれは喜ぶべきことだろう。団体行動をしつかりとできるクラスは良いクラスだしな。

(そういえば、あいつもこういつた祭りが好きだったな)

本格的に楽しみたいと言った次の日に浴衣と下駄を買ってきて、祭りの途中で鼻緒が切れてこけた姿は今でも思い出すと少し笑えた。ここにあいつがいたら、子供みたいにはしゃいでただろうな……。

「って、駄目だ駄目だ」

久しぶりにあいつの夢を見たせいか、あいつのことばかりが頭に浮かんでしまう。

こんなことじゃ仕事にならないな。屋上で一服して、気分でも変えるか。俺はポケットに忍ばせてある煙草とライターを確認しながら、屋上へ向かう階段へと足を運ぶ。

が、その足を途中で止めて、教室へと戻ることにした。

それはなぜかというところ……窓から見えた校庭で馬鹿どもと愚弟が西村先生に追いかけられていたのを見てしまったからだ。校庭から

校舎までは結構な距離があるのに、西村先生の恫喝が魂まで響きそ
うなほど大音量で聞こえてきた。

「……あとで西村先生に謝っておくか」

謝罪の言葉はどんなのが良いだろうか、と考えつつ俺は教室へと
歩を進めた。

とりあえず謝るより先に、馬鹿なことをした弟には俺のありがた
い拳骨をプレゼントしてやった。

「……酷いよ兄さん、これ以上頭悪くなったらどうすんのさ？」

「大丈夫だ、それ以上悪くなったらきつと死ぬしかないから」

「それ悪くなるよりひどくなぶっ!!」

「はいそこ、静かにしろ」

愚痴愚痴と過ぎ去ったことを掘り返す弟の額にチョコレートをプレゼ
ントして黙らせる。ちなみにこれは体罰じゃない、優しい兄からの
愛の鞭ってやつだ。だから問題になることはない。ついでにほかに
も喋っている馬鹿どもにも優しく、チョコレートをプレゼントして黙ら

せる。

「おめえら、騒いでる暇あったら何でもいい、その少ない脳味噌でアイデアひねり出せ。じゃなきゃあ……………な？」

スツと馴れた手つきでチヨークを構えると、バカどもがビクツと身構えるのが気配で分かった。単純で助かる。とりあえず静かになったところで懐の煙草とライターを出す。

「ケホケホツ」

煙草をくわえたところで姫路の咳が耳に届く。顔を見てみれば、心なしか少し頬が赤くなっている。

「……………(ジ)」
「……………(ジ)」
「……………(ジ)」

そして明久と土屋と女つぱい男の生徒からの責めるような視線。

「……………わーったよ、だからそんな目でこっち見んなよ」

はぁ、と俺は溜息を吐きながら両手をヒラヒラと振り、啞えていた煙草を箱に戻して懐にしまう。

口内が物寂しいからか、なんとなく窓に肘をつき、空を見上げた。

「……………バカのお守りも大変だよ、冬香」

無意識に呟いた、今は亡き妻の名前は、前より少し重く感じた。

第4・0話（後書き）

あまり多くを突っ込まないでください。お願いします。

第4・5話

朝、教室に入るとそこは闇の魔術を行う部屋となっていた。

「…………部屋間違えたか？」

クラスが表記されているプレートを見る。うん、やはり2 Fを書かれている。

俺は首をひねり考える。確かここは清涼祭で出す中華風喫茶店の準備をしていたはずだ。その場に俺が立ち会っていたのだから間違いない。

視線を教室へと戻す。教室内の窓は暗幕貼ってあり、外からの光を遮断している。教室の端にはどこから調達してきたのかヤギの頭蓋骨が鎮座し、その周りを蝋燭が取り囲んでいる。そして教壇あたりで騒いでいる、怪しいを絵にかいたような黒覆面に黒マントの集団。そしてなぜか床に転がっている明久。

これらのデータから導かれた結論。

「お前ら何やってんだよ……………」

あそこに集まっている連中がFクラスの馬鹿どもと分かり、思わずため息が出る。いったいいつからこの学園には黒魔術部ができたんだ。

最近増えた頭痛で頭を押さえながら教室に足を踏み入れる。同時に、

「諸君、ここはどこだ？」

「最後の審判を下す法廷だ！」

「異端者には？」

「死の鉄槌を！」

「男とは？」

「愛を捨て、哀に生きる者！」

「宜しい。それではこれより、2・F異端審問会を開始する！」

覆面集団が物騒なものを構えて俺を睨む。覆面で表情までは分からないが、目には明らかな殺気が宿っている。

「……明久、どういうことだ？」

「いや、それが僕にもよく分かってないんだよね」

手足を縛られた状態で器用にこちらを向く明久。そのまま放っておくのも流石にまずいと思い、とりあえず明久の手足を専門的な縛り方で縛る荒縄をほどく。しっかしなんつー縛り方してんだ。たしかこの縛り方拷問ようの縛り方だったはずだぞ。

「珍しく朝早く教室に来たら、いきなり皆に取り押さえられ立と思つたら変な匂いのするハンカチ嗅がされて、気付いたらこうなっていた」

「……あいつらが馬鹿だったのがよく分かった」

おそらく明久が言う変な匂いはクロロホルムをつけたハンカチだ

ろくな。どっからこいつら仕入れてくるんだよ。

「……とりあえずお前ら、何してんだ？」

すると代表らしき男（あまり見分けがつかない）が前に出る。

「異端者、吉井秋人。汝罪を認め。悔い改めるか？」

「ちょっとまてツッコミどころが多いぞ」

「思うがこいつら俺が教師ということ忘れてないか？」

「一応聞いておくが、俺がいつたい何の罪を犯した？」

「ふっ、忘れたとは言わせんぞ。あの日のあの時間のあの会話！あれを忘れたなんてことはないはずだ！！」

「正確な日時と場所を言えよ」

あれとあので分かったら俺は今頃天才になってるはずだ。

「あくまでシラを切るか。ならばこちらにも考えがある！」

シラ切ってねーよ、と言う前に須川の手から一つのテープレコーダーが目の前に突き出される。そして、スイッチが押される。

『俺結婚してたんですよ』

「…………殺せええええええつ！！！！」「…………」

「ああ、あんときの会話の一部か」

膨れ上がる殺意の中、聞いた自身の声で合点がいった。確かこれ

は昨日西村先生と話していた時の部分だ。とりあえず今決まったことは、土屋の成績を全体的に落とすことだな。それと……。

「さあ罪人よ。悔い改める気になげぶふうっ!!」

かがんだ姿勢から放たれた右アッパーが覆面バカの顎を寸分違わずに打ち抜き、吹き飛ばす。きれいな弧を描いて飛んだ代表者は蛙が潰れるような音と共に畳に沈んだ。

「……」

水を討ったような静けさが教室全体に広がる。

「一体これはどういうことじゃ!？」

木下の驚く声が扉のほうから聞こえる。俺は身体の内側からあふれ出る負と怒りの想念の全てを覆面どもに向けたまま、笑顔で木下のほうに振り返る。

「ああ、木下か。すまないが、少しの間教室の外にいてくれないか？ ちょっと掃除したいから」

掃除の部分を強調すると、木下は合点がいったようで、コクコクと頷くとすぐに扉を閉じてくれた。聡明な生徒で助かった。

俺はあくまで、笑顔で覆面集団に向き直る。そう、あくまで笑顔で、だ。

「さあてお前ら」

「

首と指をボキボキと鳴らすと、覆面集団が怯えるのが分かった。

ようやく気付いたのだろう。自分たちが、俺の逆鱗に触れてしまったことを。そしてそれが、最悪の結末を迎えると言ったことを。

「覚悟は、い・い・よ・な？」

直後、断末魔よりもおぞましい悲鳴が学校中に響いたことは言うまでもない。

第5・0話

馬鹿どもに対しての拳と脚を使ったちよつとした説教を終えた後、職員室に行った俺は学園長に呼び出された。クビでも言われるのかと思いつながら学園長室へへ行くと、そこで告げられた事に少し驚いた。

「召喚大会のゲスト？ 俺が？」

「そうさね。新任のあんたにぜひともそれをやってもらいたくてね。頼めるかい？」

口ではそう言いつつも、目では『断れるはずないだろ？』と語っている。これが学園長であることに疑問を抱かずにはいられないな。召喚大会は、校庭に作られた特設ステージで召喚獣による二対二のタッグマッチ戦。ルールも至極簡単なもので、決められた教科の点数で戦い、勝ち負けを決める。参加は自由なため、A〜Fまでが出てくる。だから誰が誰と戦うかはトーナメント表が出るまで分からない。Fクラスの奴がいきなりAクラスとあたることもあるらしい。その場合、不憫としか言いようがない。

ここで当然の疑問が生まれる。

「どーせあんたの事だ。なんか企んでるんだろ？」

「さて？ 何のことだろうねえ」

慇懃無礼な俺の口ぶりに注意を言うことなく、なんのこっちゃしないと言った顔をする学園長。

経験から言わせてもらえば、こついった類の人間は絶対に何か企んでいる。絶対に、だ。

だが、ここは深く追求しないでおくとしよう。この学園長の機嫌

を損ねたら何かがあるかわかりやしなないし、あえて企みに乗ってやると言つのも悪くない。

思わずニツと口の端が吊りあがる。おそらく今俺は悪役みたいな笑みを浮かべてるだろう。

「ま、そう言うことにしときますよ。ただし、ポーナスは弾んでくださいね狐婆」

「ふんっ、生意気を。でもまあ、少しぐらいなら考えておいてもやらないよ、クソジャリ」

「はっ、期待してますよ。そんじゃ」

踵を返し、俺はシガレットチョコを口に運びつつ学園長室をでた。

「さてと……教室のほうは一体どうなってるかな？」

そろそろ喫茶店の準備も済んでいるはずだろう。様子見にでも行ってくるか。

俺は学園長室を後にし、教室へと歩を進めた。

教室に入って最初に見たのは、おいしそうに胡麻団子を頬張る女子組と口から血らしきものを吐いて倒れ伏す坂本雄二の姿だった。

天国と地獄の両方をいっぺんに見れた気分になり、少しだけ思考

が停止する。

「……一体何があつた？」

「あ、秋人先生。実は雄二が胡麻団子を食べたなら、倒れたのじゃ」
「待て、胡麻団子はそんな毒性のある食いもんじゃないはずだ」

殺意か悪意を持ってわざと混入させない限り、胡麻団子に使われる材料に劇物はないはずだ。

「あゝ、おい坂本。大丈夫か？」

一応だが、生徒である以上気にかけておいてやるう。味が変でびっくりしただけだろうしな。

「ふつ。何の問題もないぜ先生」

「ならいいんだが、なぜこつちを向かないんだ？」

俯けの状態では話しにくいだろうに。本当に大丈夫か？

「あの川を渡ればいいんだろ？」

訂正。まったく大丈夫じゃなかった。

「ゆ、雄二！ その川はダメだ！ 渡ったら戻れなくなっちゃう！」

「……一体どんな胡麻団子食ったんだよ？」

胡麻団子一つで身体の丈夫そうな坂本を三途の川の入口に送るとは。よっぽど危険な薬品が使われたことだろう。

そんな死ぬ一歩手前の坂本に、明久が近づき必死になって心臓マ

ツサージを始める。各教室にAEDの設置を義務付けてくれるように、あとで学園長に進言しとくしよう。

しかし、明久の方法じゃ助かる確率は五分五分だな。しかたない。

「明久、ちよつとどいてる。ついでに女子の奴らから俺が見えないように壁になれ」

「えっ、ちよ、どうすんの兄さん！早くしないと手遅れに」

「だから、手っ取り早く終わらせるんだよ」

これが成功しなかったときは、坂本には悪いが諦めるとしよう。

俺は明久を壁にし、女子組に見えないのを確認した後、思いつきり拳を振り上げる。そして、坂本の心臓付近めがけておもつきり振り下ろした。

「六万だと？バカを言え、普通渡し賃は六文と相場が決まって…
…げぶらっ!?!」

「んじゃ明久。後頼むわ」

多少変な音がしたが、蘇生成功。尊い生徒の命が一つ救われたな。それにしても、馬鹿と付き合うとやはり疲れる。朝も歳に似合わない少しはしゃいじまったし、少し腹が減った。

「お、胡麻団子一つ余ってんじゃねーか。土屋、これもらうぞ」

「あっ!?! 兄さんそれは!」

「秋人先生!」

「……………っ!?!」

明久たちが驚いたように顔を上げ、俺の手から胡麻団子を奪おうとする。尋常ではないその顔つきは、ある意味鬼気迫っていた。

そんなにつまい胡麻団子なのか？ だとしたらなおさら俺が最後

の一つを喰ってやる！ 俺はそう思いながら胡麻団子を口の中に放り込んだ。

瞬間、明久たちの顔が一気に青ざめた。

「……さよなら兄さん。母さんたちにはちゃんと説明しとくよ」

「短い間だったのじゃが、良い思い出であったぞ」

「……………冥福を祈る」

そろって俺に向かい合唱をする明久たち。まるで俺が死ぬみたいじゃないか。ま、今はそれよりも胡麻団子を食うとするか。

「お前ら一体何を言ってるんだ？ ……うん、表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず辛すぎる味わいがとても……独創的だな」

「……はあっ!?!?」

「ん？ どうしたんだお前ら？ 鳩が豆鉄砲食らったような顔して？」

三人の驚いた顔は、俺の記憶から当分は無くなりそうにないほどのインパクトを持っていた。

第5・0話（後書き）

ここ最近、あまり寝れなくて文章がグダグダしているのにツッコミは無しの方で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1129o/>

バカと教師と兄弟と

2011年9月11日18時49分発行